タバスコなんて掛けないで

PN 生方冬馬

人　物

笹倉灯里（３２）主婦

笹倉茉莉奈（１０）灯里の娘

笹倉翔太（３４）灯里の夫

○笹倉家・リビング（夜）

笹倉灯里（３２）笹倉茉莉奈（１０）笹倉翔太（３４）が食卓に着いている。

食卓には、色とりどりの美味しそうな料理が並んでいる。

茉莉奈「いただきます」

灯里・笹倉「いただきます」

食べ始める三人。

笹倉「あ、忘れてた」

笹倉、キッチンに移動。タバスコを手に戻って来る。

笹倉、嬉しそうにタバスコを料理にドバドバとかける。

その光景を嫌そうに見つめる灯里。

灯里「ねぇ、パパ。今日の料理、なにか不満があった？」

笹倉「いや？なにもないよ。いつも通りおいしそうじゃん」

灯里「それじゃタバスコ必要なくない？そんなにドバドバかけて…」

笹倉、タバスコの瓶を不思議そうに見つめて。

笹倉「俺、タバスコ好きだからさ。いいじゃん、別に」

灯里、不満そうに笹倉を見つめる。

灯里「いつも言ってるけど、味見もしないでタバスコ掛けられるのいやなんだけど」

笹倉、苦笑いをしながら。

笹倉「ごめんってば。つい、癖でさ。次は気をつけるから」

灯里、じっと笹倉を見つめる。

笹倉、バツが悪そうに食事を書き込む。

茉莉奈「ねぇ、パパ。それって美味しいの？」

笹倉「お、茉莉奈もついに興味が出たか。美味しいよ。食べてみる？」

灯里「ちょっと、茉莉奈にはまだ早いわ」

茉莉奈「えー、食べてみたい！」
好奇心でいっぱいの茉莉奈に根負けした灯里。
灯里「それじゃ。ちょっとだけね」
ニコニコしている笹倉が、茉莉奈の更にタバスコをかけようとする。
灯里「ちょっとまって。取り皿に出してよ」
灯里、席を立ってキッチンから小皿と水を取ってきて食卓に置く。
笹倉「茉莉奈もタバスコデビューだな」
笹倉、小皿にタバスコを出す。
茉莉奈、ワクワク顔でタバスコを舐める。
表情が涙目に変わる。
茉莉奈「辛い！！」
灯里「茉莉奈、お水、飲もう」
灯里、泣いている茉莉奈に水を飲ませる。
笹倉「えー、美味しいだろう？茉莉奈」
茉莉奈は泣きながら水を飲んでいる。

灯里「泣いているのよ！何言ってんのよ！」
不思議そうな表情で茉莉奈を見つめる
笹倉。
灯里は茉莉奈を慰めている。

○笹倉家・リビング
カレンダーに丸が着いている。１１月
２７日。
食卓では灯里と茉莉奈が楽しそうにメ
モを書いている。
茉莉奈「今日のパパの誕生日、私がお料理し
たい。いいでしょう」
灯里「もちろん。きっとパパも喜ぶわよ。な
に作る？」
茉莉奈「シチュー作りたい！あと、おっきい
丸ごとのチキン！」
灯里「わぁ、美味しそう。それじゃ、パンに
しようか。平岡ベーカリーのフランスパ
ン！」

茉莉奈「うんうん、私、あそこ大好き！絶対にそれがいい！」

灯里「あとは、ケーキは予約してあるから…。買うものは…」

茉莉奈「パパ、喜んでくれるかな？」

灯里「茉莉奈が作るんだもん。喜ぶわよ、絶対。今から楽しみだね。」

茉莉奈「うん！ね、ママ。早く買い物行こうよ。」

灯里「はいはい。ちゃんと上着着てね。」

茉莉奈「はーい」

灯里と茉莉奈は嬉しそうに買い物の準備をしてリビングから出ていく。

○笹倉家・リビング（夜）

リビングはホームパーティー用に飾り付けられている。

壁には「Happy Birthday」の風船が吊り下げられている。

灯里と茉莉奈がクラッカーを手に持って、リビングのドアに向かって構えている。

ドアが空いて、会社帰りの笹倉が入ってくる。

灯里・茉莉奈「ハッピーバースデー！パパ」

声とともにクラッカーが鳴らされる。

驚く笹倉。

笹倉「びっくりした～。今日、誕生日だっけ？」

茉莉奈「パパ、忘れないでよ～。一生懸命準備したんだから！」

灯里「風船も飾り付けも茉莉奈が頑張ったのよ」

笹倉「そっか～。ありがとう。茉莉奈。大変だっただろう」

笹倉、茉莉奈の頭を撫でる。

嬉しそうな茉莉奈。

茉莉奈「えへへへ」

灯里「さ、パーティーしましょう。着替えてきて」

笹倉「うん、急ぐから待ってて」

笹倉、リビングから出ていく。

灯里と茉莉奈はキッチンからシチューやローストチキンなどの料理を運んでいる。

ケーキが食卓の真ん中に置かれる。

笹倉が部屋着に着替えて戻って来る。

三人が食卓を囲む。

灯里「今日の料理は、茉莉奈が作ったのよ。美味しそうでしょう」

茉莉奈「頑張ったんだから！」

笹倉「うんうん。茉莉奈、偉いな。って、あれがないな」

笹倉、席を立つ。

茉莉奈、きょとんとしている。

灯里の表情が険しくなる。

戻ってきた笹倉の手にはタバスコ。

灯里「ちょっと、やめてよ！」

笹倉「えっ、なんで。」

灯里が止めようとするが笹倉はタバスコをシチューに投入する。

シチューに赤い色が混ざっていく。

茉莉奈は目に涙を浮かべている。

笹倉、満足そうにシチューをかき回して一口食べる。

笹倉「うん。やっぱり、これだな」

耐えきれなくなった茉莉奈。

声を上げて泣く。

茉莉奈「パパ〜。どうして〜」

慰めようとする灯里だったが、灯里も涙で声が出ない。

笹倉「え、なに？どうしたの」

灯里「ど、どうしたのじゃないでしょう！せっかく茉莉奈が作ったのに！」

笹倉「え、だから美味しいよ。シチュー」

灯里「どうして味見もせずにタバスコ混ぜちゃったのよ！せっかく、せっかく、茉莉奈が頑張ったのに！」

問い詰める灯里に笹倉はきょとんとしている。

笹倉「いや、だって…。タバスコ入れたほうが…」

灯里「茉莉奈の気持ち、考えてよ！」

笹倉「いや、気持ちたって…。茉莉奈、おいしいよ」

困惑している笹倉は気休めのように茉莉奈に声をかける。

茉莉奈「タバスコォ、なんで～」

茉莉奈はますます泣く。

笹倉「いや、何泣くんだよ。タバスコ掛けただけじゃん。ねぇ、俺の誕生日なんだよ？泣きたいの俺だよ」

イライラし始めた笹倉。

灯里は、バンッと食卓を叩いて立ち上がる。

灯里「もういや、耐えられない！茉莉奈、いきましょう！」

灯里は泣いている茉莉奈を立たせると
上着を着せ始める。
笹倉「どうしたんだよ！いきなり！」
声を荒げる笹倉に灯里も負けじと言い
返す。
灯里「どんなに心を込めて作っても、タバス
コ、タバスコ！もう、やだ！」
笹倉「何言って…。タバスコくらいで大げさ
なことすんなよ。ほら、座れって」
灯里「あなたは、私だけじゃなくて茉莉奈ま
で傷つけたのよ！許せない！」
灯里、バッグを掴んで茉莉奈の手を引
いてリビングのドアを開ける。
振り返って。
灯里「そんなに好きなら、一生、タバスコだ
け食べてろよ！」
灯里、嫌悪の表情で笹倉を一瞥し、茉
莉奈とともにリビングを出ていく。
ひとり残される笹倉。
笹倉「意味わかんねぇよ…。」

ＰＮ　生方冬馬